

学会等報告

世界柔道選手権 2010 東京大会観戦記

—大会 3 日目を中心に—

仲 田 直 樹

Naoki Nakata: 2010 world judo championship Tokyo rally witness's account—during the third rally day—. Bulletin of Sendai University, 42 (2) : 133-136, March, 2011.

Key words: Tachi-waza, Katame-waza, Hold-down
キーワード: 立技, 固技, 抑え込み

1. はじめに

昨年、本学を卒業した田中美衣が大会 3 日目の女子 63kg 級に出場するというので、我々仙台大学柔道部員及び関係者は総出で応援へかけつけた。今年 3 月までともに練習してきた仲間がこの大舞台で試合を行い、それを観戦することは、在学生にとって非常に刺激になると期待されたためである。

本観戦記では、観戦に訪れた大会 3 日目を中心に好成績を残した選手の戦いぶりを報告することにしたい。

級, 12 日に男子 66kg 級, 60kg 級, 女子 52kg 級, 48kg 級, 最終日に男子無差別級, 女子無差別級が行われた。

男女の総出場選手数が多い上位 10 カ国の一覧を表 1 に示した。今回は各国最大 36 名まで出場できたわけだが、フルエントリーしたのは日本と韓国だけだった。男子で強豪国として知られるグルジアは、男子のエントリーは 17 名と多いが女子が不参加のため一覧には記載していない。次期オリンピックを控えた英国は、女子を中心に 23 名派遣していた。

2. 参加国及び国別メダル獲得数

世界柔道選手権は、オリンピックに次ぐ最高ランクの大会と位置づけられている。2010 東京大会は国際柔道連盟主催のもと、9 月 9 日 (木) ~ 13 日 (月) の 5 日間にかけて、約 120 カ国・900 名が集結し、国立代々木競技場第一体育館で開催された。大会は、9 日に男子 100kg 超級, 100kg 級, 女子 78kg 超級, 78kg 級, 10 日に男子 90kg 級, 81kg 級, 女子 70kg 級, 11 日に男子 73kg 級, 女子 63kg 級, 57kg

表 1. 主要国の出場選手数

	国名	男子	女子	合計
1	日本	18	18	36
1	韓国	18	18	36
3	米国	16	16	32
4	ロシア	16	15	31
5	モンゴル	18	11	29
6	フランス	14	14	28
7	中国	11	16	27
8	オーストラリア	15	8	23
8	英国	9	14	23
10	ブラジル	13	7	20

表2. 国別メダル獲得数

	国 名	金	銀	銅
1	日 本	10	4	9
2	フ ラ ン ス	2	1	3
3	韓 国	1	0	1
4	ギ リ シ ャ	1	0	1
5	ウズベキスタン	1	0	0
6	ア メ リ カ	1	0	0
7	ブ ラ ジ ル	0	3	1
8	中 国	0	2	1
9	オ ラ ン ダ	0	2	0
10	ド イ ツ	0	1	0
10	ウ ク ラ イ ナ	0	1	0

表2は今大会のメダル獲得数を国別に上位10カ国のみ示した。今回、日本は男女とも2桁のメダルを獲得していて他を圧倒する成績であった。各階級2名出場となり日本開催で確かに地の利はあったかもしれないが、2009年のロッテルダム世界柔道選手権大会では男女総メダル数が7個であったことを考えると評価できる。また、新ルールによって下半身への攻撃に規制がかかったことにより、低姿勢での攻撃を得意とする旧ソ連勢の活躍が目立っていなかった。

3. 戦評

1) 大会初日

男子100kg級の穴井は、昨年のロッテルダム大会での失敗があるせいか、いつもの思い切りのよい柔道とは違い慎重になっていると感じた。しかし、地力の違いと意地で優勝を遂げた。男子100kg超級は、今年全日本選手権覇者の高橋が準決勝で3連覇を狙うリネール（FRA）と対戦した。善戦したが、ゴールデンスコアの末、横落で敗れた。注目の鈴木は初戦で敗れた。

女子78kg超級には、塚田と杉本が出場した。塚田に優勝の期待がかかっていたが、本来2番手の杉本が切れ味鋭い払腰を中心に攻め、オール一本勝で優勝を成し遂げた。女子78kg級の緒方が得意の固技を駆使し、3位に入った。本人にとっては大きな自信となったであろう。

2) 大会2日目

大会2日目には、世界ランキング1位の小野に期待がかかったが、3回戦でアテネオリンピック81kg級優勝のイリアディス（GRE）に惜敗した。小野は、序盤に相手の大外巻込を受け、崩れはしたがポイントを宣告されることはなかった。しかし、審判委員からその判定にクレームがつき相手の有効となり、結局その有効ポイントでの敗退となった。イリアディスは決勝でも日本で若手期待の西山をゴールデンスコアの末、豪快な払巻込で一本勝を決め優勝した。敗れはしたものの、西山も初出場で準優勝は評価できる。

女子の70kg級では日本人同士、国原と渡邊が準々決勝で対戦するという悲運な組み合わせとなった。この対戦は国原に軍配が上がり、準決勝では強豪デコスに敗れるも3位を確保した。

3) 大会3日目

大会3日目には、男子の73kg級と女子の57kg級、63kg級が行われ、各階級の日本選手は男女とも好成績であった。その観戦の中で立技から固技への移行が素早く行われていたことが非常に印象に残った。ここでは主に男子73kg級の秋本（本大会優勝）、女子63kg級の田中（本大会2位）、57kg級の松本（本大会優勝）に焦点をあてて戦評していきたい。

まず、大会随一の好勝負と評された男子73kg級の準決勝、世界ランキング1位のワン（KOR）と秋本の試合は、終始互角の展開が繰り返された。組み手争いや相手への圧力も互角で、互いに相手を崩すような投技も見られず技数もほぼ同数であった。唯一勝負を分けたのが秋本の固技である。ワンの掛け潰れや中途半端な技を掛けられることがあると、すかさず自分の得意の返し方に移行する。ワンも秋本の得意のパターンで返されないように逃げようとするので、そこで更に隙間が生じ返しやすくなる。開始1分には一度抑え込むがすぐに逃げられてしまう。ゴールデンスコアに入っても抑えるがすぐに逃げられてしまうという展開であったが、結果的にはこの2度の抑え込みが攻勢と見

なされ相手のスタミナを奪い、大きく判定の材料になったことは間違いない。



(写真 1)

男子 73kg 決勝戦。秋本は、消極的なエルモント (NED) を攻め続け、巧みに固技へと移行。1 分 34 秒、崩袈裟固で金メダルを獲得した。

女子 57kg 級の松本も秋本同様、抑え込みにいくまでの自分の形を確立していることが印象的であった。松本の場合は、自らが仰向けとなり相手と正対し、引き込むような体勢から相手をひっくり返す形である。準決勝では開始約 20 秒の小外刈で崩し、場外際にもかかわらず相手を場内へ強引に引き込み、最後は横四方固で抑え込んだ。この引き込み技も秋本選手の技同様、相手が嫌がり逃げようとすれば逃げようとするほど互いの間に隙間が生じ、ひっくり返しやすくするという合理的な意味がある。決勝でも相手のモンテイロ (POR) が固技勝負になると何度も場外へ逃げようとする場面が見られた。松本の固技を警戒していた結果が誘導したものと考えられる。



(写真 2)

女子 57kg 級決勝戦。序盤から主導権を掌握していた松本は GS 後に小外刈で一本勝。

女子 63kg 級の田中の場合は先述の二人のような型にはめるような決めパターンはないが、そつなく固技をこなし、どのような体制からでも抑えられることが強みである。1 回戦は巴投 (有効) からそのまま横四方固で一本勝ちをした。2 回戦は払巻込 (技有) から後袈裟固に抑え込むも逃げられ、抑え込んでは逃げられの繰り返しが続く。結局残り時間がないところから 4 度目の後袈裟固 (技有) で合技の一本勝ちをした。3 回戦は、相手の掛け潰れを 2 度固技へ移行するが決めきれず、中盤の大内刈で一本勝ちをした。準々決勝では開始早々固技へ移行し、袈裟固で抑えた。わずか 30 秒での早業であった。準決勝では相手の力強い柔道に苦戦するも、巴投や相手の技の掛け潰れから固技へ移行するも抑え込むまでには至らず、このままゴールデンスコアに突入するかと思われた残り 6 秒で抑え込むことに成功する。決勝では上野の厳しい組み手の前に持ち味を発揮することができなかった。柔道競技は、双方の選手が有する身体能力と技を駆使して、激しい動きの中で攻撃防御を繰り返すスポーツ種目である。疲労も極度に達していたと考えられ、また、お互い手の内を知り尽くした日本人同士の対決ということで慎重になりすぎた面も否定できないが、もう少し技と技の掛け合いを見せてほしかったという印象をもった。



(写真 3)

女子 63kg 級表彰式。向かって左から 2 位の田中、優勝の上野、3 位のアベル (CUB) とユスポワ (AZE)。

男子の場合、体幹筋力が強い相手は四つん這い、又は腹這いで守られている状態から抑えたり関節技をとったりすることは難しい。そ

のため、秋本のように相手に100パーセント防御態勢をとられる前に返し技に入ることが重要である。このタイミングを見極めることは一般には極めて困難であるが、それを獲得するために繰り返し確認し、自然に発揮できるようになるまでの練習が必要であろう。

女子は男子と比較して体幹筋力が少ないが、一方で体に柔軟性がある。そのため、固技で勝敗が決する場合、関節技よりも抑え技で決まる試合の方が圧倒的に多い。外国選手の試合で固技を巧みに使っていた選手は見当たらず、自分がリードしている状況で時間稼ぎに固技を使っている選手が多く見られた。これを逆に利用することが外国選手を攻略するために極めて有効であり、本学出身の田中はこの点でまさに模範的な試合展開を見せてくれた。

4) 大会4日目

男子60kg級の平岡は、準々決勝で敗れたが気持ちを切り替え、敗者復活戦3位決定戦を勝ち上がって銅メダルを獲得した。男子66kg級は、海老沼と森下の若い大学生が出場した。海老沼は3回戦で敗れるも、森下が4回戦までをオール一本勝ちで勝ち上がり、決勝も相手にほとんど柔道をさせずに払腰で一本勝ちを収め、初出場初優勝の偉業を成し遂げた。森下はまだ若く、伸び盛りであるため2年後のロンドン五輪も楽しみな存在である。

女子52kg級は中村と西田の日本人同士の対戦となった。お互い手の内を知り尽くした者同士であり、優劣つけがたい展開が続く。ゴールデンスコアでも決着がつかず、結局旗判定で西田が初優勝を飾った。同じく女子48kg級でも日本人同士が対決。福見と浅見は両者とも決勝まで一本勝ちで上がってきた。こちらも優劣つけがたい展開が続くが、浅見の積極性がわずかに上回り、指導2で勝利し、初優勝を飾った。

5) 大会最終日

男子無差別級は、初日の雪辱に燃える鈴木を入れ、高橋、立山、上川の4人の日本選手が100kg超級優勝のリネールに挑戦するという形である。鈴木は準決勝まで全試合一本勝ちで勝

ち上がるが、準決勝で上川に浮落で一本負けを喫した。その上川が決勝で、高橋、立山を破ってきたリネールと争い、ゴールデンスコアを含め、全体的に押されている感じは受けた。しかし、払釣込足で3度相手を腹這いにさせたのが審判の印象に残ったのか、旗判定2-1で無差別級では3年ぶりに金メダルを日本人が獲得した。

女子無差別級には、初日の78kg超級で優勝した杉本と田知本、78kg級の緒方と佐藤が出場した。杉本は疲れのせいかな、初日のような技のキレはないものの、地力が勝り決勝まで勝ち上がる。決勝の相手はキン(CHN)で初日と同じカードとなった。杉本は、中盤に大外刈から一本背負投に連絡して体を浴びせれば有効を奪い、その後は相手の攻撃を捌いて試合終了となった。杉本が日本人女子として初めて2階級制覇の偉業を成し遂げた。

4. おわりに

2009年のロッテルダム世界柔道選手権大会で、男子は優勝者なしという悲惨な結果に終わった。しかし今回このような好成績が収められた背景には、強化選手を若手中心の編成に切り替え、海外へ派遣し経験を積ませたことや、合宿の回数を増やし練習量を増やした成果がある。逆に、足取禁止のルール改正で日本人に有利になったことや1階級2人が出場できるということ、そして地元開催という地の利もあったと考えられる。

今後、外国の選手もルールや日本選手の柔道に合わせて対応をしていくことが予想される。そのため、立技と固技を共有できることが、日本選手が勝ち続けるための重要な武器のひとつになるといえる。

(2010年11月30日受付)
(2011年2月10日受理)